

霞ヶ浦・北浦のアユについて

清流の魚としてあまりにも名高いアユが近年霞ヶ浦・北浦でまとまって漁獲されるようになりました。内水試ではこのアユの生態調査をしています。今回はこれまでに分かってきたことの概要を紹介します。

1 出現の経緯

霞ヶ浦・北浦におけるアユは春から初夏にかけて少量混獲されていた程度でしたが、1992年（平成4年）から突如として多くとれるようになりました。その年の暮れには北浦において初めてふ化後間もない稚稚魚の分布が確認され、以後これらの現象は毎年見られるようになりました。

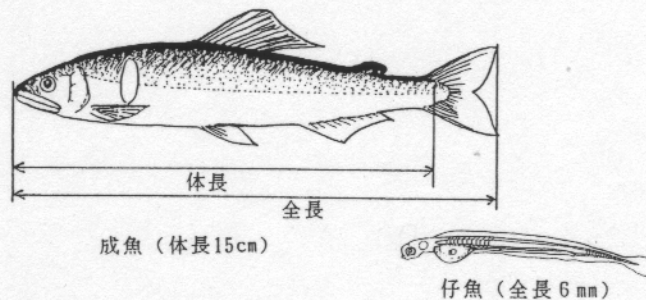


図1 アユの成魚と仔魚

2 漁獲状況

アユのとれる主漁法は張網です。食用サイズのもの5月下旬頃からとれはじめ、7月中旬頃（梅雨明け頃）までまとまって漁獲されます。夏季高温期は漁獲量が激減しますが、9月下旬から10月にかけて場所によって再び多く漁獲されます。推定漁獲量は霞ヶ浦・北浦で10トン程度と見られます。霞ヶ浦の桜川や恋瀬川、北浦の巴川等流入河川においては6月頃から餌釣り釣れるようになり、8月頃まで続きますが9月以降は少なくなるようです。

漁獲サイズは5月下旬には平均体長9cm（約10g）程度ですが、10月上旬までに平均14cm（約40g）、最大21cm（約130g）ほどに成長します。琵琶湖のアユの最大体長はせいぜい8～10cm程度なので、それと比較するとかなり大きく、肥満度も高いのが特徴です。また、大河川のアユに比べて緑色が薄い（黄色っぽい）のが特徴ですが、夏季以降徐々に色が濃くなります。

3 食性

時期や生息環境によって変化します。稚魚期にはミジンコ等の動物プランクトンを捕食していますが、5月以降成長に伴ってイサザアミ等の大型の餌が主体になります。更に6月以降は徐々に付着藻類を多く食べるようになり、アユ独特のスイカに似た香りがするようになります。

4 産卵時期と場所

アユはワカサギと同じキュウリウオ科の魚で同様に年魚（1年で産卵し一生を終える魚）ですが、産卵期はワカサギと全く違って秋季です。霞ヶ浦・北浦のアユの産卵期は9月下旬から11月頃までと見られます。この時期に北浦の巴川、霞ヶ浦の恋瀬川で産着卵やふ化仔魚が確認されたことから、これらの流入河川が産卵場になっているようです。また、同じ時期に湖内でも成熟魚が多く分布していることから湖岸でも産卵していることが考えられます。

5 季節的移動

秋に流入河川の河床の砂礫に産みつけられた卵は2週間前後でふ化します。ふ化仔魚は全長6mm程度の細長い形（シラス型）で、遊泳力が弱いので1日もしないうちに霞ヶ浦・北浦に流下します。その後徐々に成長しながら湖内全域に分散していきます。冬期を湖内で過ごした稚魚は4月以降流入河川に遡上する群と湖内に残留する群に分れるようですが、真夏になると湖内ではほとんど見られなくなります。これは夏季の湖内水温がアユにとって高過ぎるので、水温の低い流入河川へ2次的に残留群も遡上するためと考えられます。そして、9月下旬頃には再び湖内に戻る群があるようです。

このように霞ヶ浦・北浦においては琵琶湖のように一度も海に出ないで一生を過ごす陸封型のアユがいることが分かってきました。近年のアユの多獲現象の継続はこの陸封型個体群の出現と増加によって支えられていると考えられます。

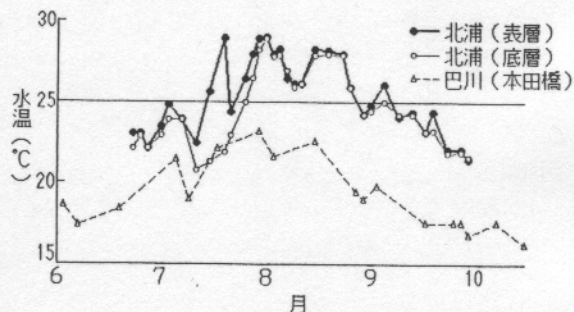


図2 北浦及び巴川の夏季水温の推移（1996年）